

「1969……秋」

昭和45年卒 龍宮谷辰彦

同窓生と話をした時、「ひよっとしてあの年代ですか？」と聞かれたことが、今まで少なからずある。私たちの学年は、その前後を見渡しても、類まれな共通の記憶が胸に刻まれてるのではないかと。そんな思いから、断片的となるが、「1969年……秋」をたどってみた。

ただ、どのように書けばよいのか？ 考えだすと、筆が進まなくなる。ここでは客観的な事実を中心に、記憶違いがあるかもしれないが、……、当時の17歳の私のつたない思考回路と記憶を呼び起こしてみた。

私自身、今ひとつ高校にもなじめず、麻雀やパチンコに逃避消費していたような記憶。そんな感じで……、3年を迎えていた。

折しも学生運動の真ただ中、年初の安田講堂の攻防、それが各大学に波及し、高校にも広がり始めていた時期だった。新聞やテレビが連日のように、バリケード封鎖、大衆団交、機動隊導入等々、全国各地の学校の様子を報道し、……、騒然としていた。

その年の夏休み、折原浩氏を招いて校内で自主講座を開くらしい。そんな話も耳にしたが、関心の持ちようもなかった。そんな中、2学期が始まったその日、中庭での全体朝礼で校長の講話がはじまるやいなや、あちこちからいきなり罵声が飛びかった。その時に初めて、何か知らないところで何か動いているという感覚をもった。

9月も終わろうとしていた時、隣の千葉東高校で封鎖騒ぎがあったが、ほどなくして、10月6日、月曜日、秋晴れのすがすがしい朝、いつものように登校して、坂道を上がりきったところ、ちよっといつもとは違った雰囲気。校門を入ろうとすると数人の先生方が誘導しているの、迂回して教室へ向かった。

どうも図書館が封鎖されたらしいとのこと。ニュースなどではしきりに聞いていたことであつたが、いよいよ足もとにもというの、当時の素直な感じであつたか？

授業は何事もないように進められ、比較的静かに時間が流れていったように思う。何時ごろ

からか「私服が入っているらしい」とのうわさが流れ始めた。確かに図書館付近には見慣れない人が……いたような。

特に動きもなのまま、放課後を向かえたが、皆、帰らずに図書館前に集まり始めた。暗くなっていくと共に「この問題を自分のこととして考えよう」との呼びかけで、皆、熱を帯びてきた。ただ、私自身は何が問題かもきちんとつかめていかなかったように思う。

この頃から、報道の腕章を巻いたカメラマンもチラホラ見かけるようになる。

「機動隊が入るかも」いつしか、そんな噂が流れ始めた。

気がつく、あたりはもう真つ暗になつてい……る……

何時頃か？……

突然に……、「機動隊が来たぞー」の声……

皆、一斉にその場を離れて、校門のほうに向かう。校門越しの坂の中腹に、指揮官車、投光器の強烈な光、ガシヤガシヤという音とともに



校内に入る機動隊の車に抗議する千葉高生(昭和44年10月7日の「毎日新聞」より)

鈍く光るジュラルミンの盾。その後ろには濃紺色で身を固めた、いかつい機動隊員の隊列が……。見慣れない異様な光景が眼前に広がり、興奮が一気に高まる。矛先が一斉に機動隊に向かい、全員を巻き込んで「カエレ!カエレ!」の大合唱。……………。

……当日はかなり遅い帰宅となった。茶の間では家族三人が揃ってテレビを見ていた。待ちわびたように、「遅かったじゃないか!何していったんだ!」さつき、学校に機動隊が入って、

大変だったんだ……」そんなやりとりの矢先、NHKの9時のニュースが始まる。……と、……いきなり、千葉高に機動隊導入の画面が……。タイミングの良さと報道の大きさに驚いた……。

終わるやいなや、余程心配したのか、9歳年上の兄が、「よおく、考えろよ!」道の間違えるなよ!」しばらくの間、両親よりも強い口調で諫められた。

これが当日の断片的な記憶である。

この日を境に、校内は雰囲気が一変した。校門では連日のピラ配り、新聞や印刷物が校舎内のあちこちに散乱し、立て看が乱立する。誰がつけたか「No More 106」の看板も……。各学年を巻き込んだの縦割り討論や中庭での集会。授業もほとんど進まない。

日本史の授業では、急遽、教師を外して自分たちで昭和史を勉強しようということになり、教科書は岩波新書に取って代わった。

それから、しばらく過ぎて、「佐藤首相訪米阻止闘争」なるものが……。

「おい、ちょっと出てみようぜ!」おおい出よう!」

学生服を脱ぎ、運動靴を脱げないように紐で固く縛りつけ、赤と黒に塗り分けられたヘルメ

ットをかぶり、口元はタオルで覆う。こうなるとお互いに顔を見合わせても誰だかわからない。身分証明証や定期など身元が分かるものはすべて、身から離れた。いざというときの「黙秘権」

「3泊4日」なる言葉も聞いた。

中庭での集会で氣勢を上げた後、スクラムを組んで校門を出る。その数、数十名???

「アンボンサイ!」「トソーショウリ!」

「アンボンサイ!」「ホーベソーシ」シユブレヒコールを繰り返しながら、右に左に蛇のよう

に進む。ジグザグアモを繰り返しながら、中央公園へ……。銀座通り近くになると両脇を警

官隊にがちり固められる。時々、うねりで警官隊にぶつかると、隊列に入るともう自身での

自由は利かず、動くままである。しきりにフラッシュがたかれ、カメラのシャッターが切られ

る。公園内では各大学や高校の旗がひらめき、あちこちでハンドマイクを手にしてアジ演説で

氣勢をあげている。再度の集会。最後はスクラムを組んで「インターナショナル」。たくさん

のヘルメットが右に左に揺れる。歌詞に半分酔いそうな……。これも悪くはないな、そんな感じを一瞬抱いたような……。解散し、主力は

そのまま蒲田へ向かい、私たちは引き揚げた。ヘルメットを脱ぎ去り、タオルで汗をぬぐい取

りながら、真つ暗な学校への坂道を登った。

当時、社会の矛盾を深く考え、真剣に熱く関わっていった仲間がいた。かたや、何も考えず、その時の感覚で動いていた当時の私。つたない行動。

「あるいはあやつられていられるのかもしれない。でも、それでも俺はいんだ！」と自らに言い聞かせるように言って、のめり込んでいった仲間の言葉が忘れられない。

……気がついて見るとあれから、早、40年。当時、積極的に関わった人の中には、他界した人も。情熱的な行動が印象的だったJK君、校門でよくピラ配りをしていたKK君。

数年前の同窓会では当時、果敢に関わったU君が初めて元気な姿を見せた。その時の新聞記事に触れて、「見たことがないので、ぜひ、見たい」と言って皆を沸かせた。「……そうか！見る事ができなかつたんだ！」

もし、平穩に何事もなく過ぎていたらどうだったろうか？……ふと思うことがある。

周りの人の生き方や考え方、社会の出来事に少しでも関心を持つことができて、それに触発された部分も大きかったのでは？ この目には見えない影響力は非常に貴重なものとなっているのではないか？……そんな気がする。

……それに、……何となくバラバラな感じで、なかば疎外感を抱いていた同期生の気持ちも少し汲み取れたような……。

1969年、秋、……喧噪さがひととき印象深い！ 熱い季節であった。

関係する記事を纏めたアドレスを付記します。
<http://chibacool.ne.jp/beckn/1969.htm>

当時の状況については、47年卒山川健一氏の「僕らは嵐の中で生まれた」（東京書籍）にもフイクションとは思えないほどのリアルな描写があるので参考に一言加えておきます。

……どんな記憶であれ、それを文章にしておくことも必要ではと思ひ、この機会に、恥をしのんでつづった次第です。ご笑読いただけたら幸いです。

2009年 夏

Photo Album



は百祭と文化祭（昭和47年卒業アルバムより）